

朝日小事典

現代日本語

H36
261
朝日小事典

現代日本語

柴田武編

朝日新聞社

柴田武 (しばた たけし)

1918年、愛知県生まれ。東京大学文学部言語学科卒。
東京大学教授。著書『言語地理学の方法』『日本の
方言』『ことばの社会学』など。

石綿敏雄 (いしわた としお)

1928年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部国語国
文科卒。茨城大学教授。

日下部文夫 (くさかべ ふみお)

1917年、石川県生まれ。東京大学文学部言語学科
卒。東京外国語大学特設日本語学科教授。

南不二男 (みなみ ふじお)

1927年、愛知県生まれ。名古屋大学文学部言語学科
卒。東京外国語大学教授。著書『現代日本語の構造』
など。

朝日小事典 現代日本語

1976年10月10日印刷

1976年10月15日発行

編者 柴田武

発行者 伊藤道人

印刷 図書印刷株式会社

©1976

東京・名古屋
大阪・北九州

朝日新聞社

0381-331002-0042

目 次

現代日本語の問題 柴田 武 7

第一部 敬 語 南 不二男 10

敬語とは 10

敬語 敬語の周辺 待遇表現

敬語の種類 14

婉曲表現 軽蔑表現 謙讓語 自敬表現 親族呼称 絶対敬語
尊敬語 尊大表現 丁寧語 美化語

敬語の用法 21

あいさつ あだな あやまりの表現 おせじ 外国語の敬語
ことばの調子 子供と敬語 避けたいことば 女性の敬語
世代と敬語 電話の敬語 複数の表現
ふだんのことば・よそいきのことば 文末の表現

敬語の要素 33

〈尊敬語関係〉あそばす いらっしゃる おっしゃる
お〜になる お〜だ なさる くださる めしあがる
れる・られる

〈謙讓語・受給表現関係〉おげる いたす いただく
くれる・やる もらう さしあげる 狂る・させる
拜のつく語 まいる もうしあげる

〈丁寧語関係〉ございます です ます 「お」のつく語

〈呼び名関係〉相手の呼び方 くん さまとさん 氏
自分の呼び方 第三者の呼び方 ちゃん どの 呼びかけ

〈命令・依頼・勧誘〉依頼・勧誘の言い方 命令の言い方
禁止の言い方

〈応答・あいづちなど〉あいづちの表現 応答
賛成・反対の表現

日常生活上の一般概念 63

お国訛 弁 訛 箱根越えずの標準語
方言矯正 方言札

学問上の一般概念 65

共通語 生活語 里言 普遍的方言 方言文字・方言用字
方言の直しすぎ 民俗語彙 民間語源 二重言語生活
標準アクセント 方言境界線 方言意識 方言区画 方言量
方言周圏論 方言撲滅論 方言コンプレックス

日常生活上の方言名 80

京へ筑紫に阪東さ あずまことば ズーズー弁
ペーペーことば ベランメーことば オキヤーセことば
京ことば 関西弁 ト抜けことば ガンスことば 土佐弁
鹿児島弁

学問上の方言名 85

琉球語 東京方言 八丈島方言 奈良田方言 出雲方言
無アクセント

方言的表現 91

打消表現 命令表現 可能表現 推量表現 完了表現
回想表現 敬意表現 あいさつことば

音の特徴 100

ジェ・ジェ クワ・グワ ファ・フィ・フェ・フォ p音
四つ仮名 ヒとシ ラ行とダ行 アイの変母音 濁音化
無声化 鼻声化 ガ行鼻濁音

文法の特徴 109

ノとガの使い分け 「はい」と「いいえ」

特色のある語 110

結い もり 上・下 しばれる あずましい おぼんです
めんこい 汽車からオチル 雲と蜘蛛 なも いきる なんぼ
はんなり しんどい けったいな にかる であります
だんだん よか よだきー めんそーれー わかなつ
コーヒーシャーブ

第三部 外来語 石綿 敏雄 119

外来語の特質 120

外来語と外国語 外来語の役割 訳語 外国語に入った日本語
外来語の多い言語

外来語の由来 128

外来語の歴史 外来語の語源

外来語と社会 132

外来語の理解度 外来語の聞き取り調査
専門語としての外来語 服飾用語と外来語 料理用語と外来語
スポーツ用語と外来語 野球用語と外来語
商品名としての外来語 外来語の是非
コマーシャルリズムと外来語

外来語と原語のずれ 140

和製英語 発音の変わった外来語 語形の変わった外来語
意味の変わった外来語 綴字発音

外来語の表記 148

外来語の表記の問題 外来語表記のゆれ
外来語表記の歴史的变化 『外来語の表記』
外国の地名の表記 促音の表記 撥音の表記 長音の表記
ウイ・ウェ・ウォ クア・クイ・クェ・クォ イェ
イアとエア シャとシア シェ・ジェとセ・ゼ ティ・ディ
テュ・デュとチュ・ジュ トゥ・ドゥ ヴ
ファ・フィ・フェ・フォ 中黒

第四部 国語国字問題 日下部 文夫 167

表記 168

同音異義 仮名遣い、歴史的仮名遣い、現代仮名遣い
送り仮名 振り仮名 分かち書き 句読点 当用漢字 音訓表
地名の表記 人名漢字 人名の表記 教育漢字 書き換え漢字
字体表 筆順 簡体字

文字 192

文字 漢字 国字 漢字と仮名 仮名で書くことば

平仮名と片仮名 五十音 ローマ字 朝鮮文字

表記・文字の実際 206

公用文 実務文書 横書き 文字の機械化

政策 212

国語 アジア諸国の言語政策 国語国字問題の歴史

国語審議会 国立国語研究所 読み書き能力調査

参考文献 227

索引 231

装 幀 原 弘

H36
261

朝日小事典

現代日本語

柴田武編

朝日新聞社

柴田武 (しばた たけし)

1918年、愛知県生まれ。東京大学文学部言語学科卒。
東京大学教授。著書『言語地理学の方法』『日本の
方言』『ことばの社会学』など。

石綿敏雄 (いしわた としお)

1928年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部国語国
文科卒。茨城大学教授。

日下部文夫 (くさかべ ふみお)

1917年、石川県生まれ。東京大学文学部言語学科
卒。東京外国語大学特設日本語学科教授。

南不二男 (みなみ ふじお)

1927年、愛知県生まれ。名古屋大学文学部言語学科
卒。東京外国語大学教授。著書『現代日本語の構造』
など。

朝日小事典 現代日本語

1976年10月10日印刷

1976年10月15日発行

編者 柴田武

発行者 伊藤道人

印刷 図書印刷株式会社

©1976

東京：名古屋
大阪：北九州

朝日新聞社

0381-331002-0042

目 次

現代日本語の問題 柴田 武 7

第一部 敬 語 南 不二男 10

敬語とは 10

敬語 敬語の周辺 待遇表現

敬語の種類 14

婉曲表現 軽蔑表現 謙讓語 自敬表現 親族呼称 絶対敬語
尊敬語 尊大表現 丁寧語 美化語

敬語の用法 21

あいさつ あだな あやまりの表現 おせじ 外国語の敬語
ことばの調子 子供と敬語 避けたいことば 女性の敬語
世代と敬語 電話の敬語 複数の表現
ふだんのことば・よそいきのことば 文末の表現

敬語の要素 33

〈尊敬語関係〉あそばす いらっしゃる おっしゃる
お〜になる お〜だ なさる くださる めしあがる
れる・られる

〈謙讓語・受給表現関係〉あげる いたす いただく
くれる・やる もらう さしあげる 狂る・させる
拜のつく語 まいる もうしあげる

〈丁寧語関係〉ごさいます です ます 「お」のつく語

〈呼び名関係〉相手の呼び方 くん さまとさん 氏
自分の呼び方 第三者の呼び方 ちゃん どの 呼びかけ

〈命令・依頼・勧誘〉依頼・勧誘の言い方 命令の言い方
禁止の言い方

〈応答・あいづちなど〉あいづちの表現 応答
賛成・反対の表現

日常生活上の一般概念 63

お国訛 弁 訛 箱根越えずの標準語
方言矯正 方言札

学問上の一般概念 65

共通語 生活語 里言 普遍的方言 方言文字・方言用字
方言の直しすぎ 民俗語彙 民間語源 二重言語生活
標準アクセント 方言境界線 方言意識 方言区画 方言量
方言周圏論 方言撲滅論 方言コンプレックス

日常生活上の方言名 80

京へ筑紫に阪東さ あずまことば ズーズー弁
ペーペーことば ベランメーことば オキヤーセことば
京ことば 関西弁 ト抜けことば ガンスことば 土佐弁
鹿児島弁

学問上の方言名 85

琉球語 東京方言 八丈島方言 奈良田方言 出雲方言
無アクセント

方言的表現 91

打消表現 命令表現 可能表現 推量表現 完了表現
回想表現 敬意表現 あいさつことば

音の特徴 100

シエ・ジェ クワ・グワ ファ・フィ・フェ・フォ p音
四つ仮名 ヒとシ ラ行とダ行 アイの変母音 濁音化
無声化 鼻声化 ガ行鼻濁音

文法の特徴 109

ノとガの使い分け 「はい」と「いいえ」

特色のある語 110

結い もり 上・下 しばれる あずましい おぼんです
めんこい 汽車からオチル 雲と蜘蛛 なも いきる なんぼ
はんなり しんどい けったいな にがる であります
だんだん よか よだきー めんそーれー わかなつ
コーヒーシャープ

第三部 外来語 石綿 敏雄 119

外来語の特質 120

外来語と外国語 外来語の役割 訳語 外国語に入った日本語
外来語の多い言語

外来語の由来 128

外来語の歴史 外来語の語源

外来語と社会 132

外来語の理解度 外来語の聞き取り調査
専門語としての外来語 服飾用語と外来語 料理用語と外来語
スポーツ用語と外来語 野球用語と外来語
商品名としての外来語 外来語の是非
コマーシャルリズムと外来語

外来語と原語のずれ 140

和製英語 発音の変わった外来語 語形の変わった外来語
意味の変わった外来語 綴字発音

外来語の表記 148

外来語の表記の問題 外来語表記のゆれ
外来語表記の歴史的变化 『外来語の表記』
外国の地名の表記 促音の表記 撥音の表記 長音の表記
ウィ・ウェ・ウォ クア・クイ・クェ・クォ イエ
イアとエア シャとシア シェ・ジェとセ・ゼ ティ・ディ
テュ・デュとチュ・ジュ トゥ・ドゥ ヴ
ファ・フィ・フェ・フォ 中黒

第四部 国語国字問題 日下部 文夫 167

表記 168

同音異義 仮名遣い 歴史的仮名遣い 現代仮名遣い
送り仮名 振り仮名 分かち書き 句読点 当用漢字 音訓表
地名の表記 人名漢字 人名の表記 教育漢字 書き換え漢字
字体表 筆順 簡体字

文字 192

文字 漢字 国字 漢字と仮名 仮名で書くことば

平仮名と片仮名 五十音 ローマ字 朝鮮文字
表記・文字の実際 206

公用文 実務文書 横書き 文字の機械化
政策 212

国語 アジア諸国の言語政策 国語国字問題の歴史
国語審議会 国立国語研究所 読み書き能力調査

参考文献 227

索引 231

装 幀 原 弘

現代日本語の問題

日本は日本語しか通用しない単一言語国家である。標準語が徹底的に普及し、文盲率がゼロに近づいた統一言語国家でもある。しかも、その話し手人口は一億五千万。世界第六位の大言語である。

では、この日本語社会に「ことばの問題」はないのだろうか。多言語国家における、言語に起因する政治的・宗教的葛藤といった大問題はないけれども、その代わりに、きめ細かに扱わなければならない問題がいくつもある。

第一に敬語の問題がある。ここで言う敬語とは、もっとも広い意味の敬語で、人間関係に応じて使い分けることばというほどの意味である。敬語的表現は多かれ少なかれ世界中のどの言語にも認められるが、日本語のように、ことばのルールとして体系化された言語は、朝鮮半島の言語やジャワ語ぐらいのものであろう。こうした敬語の使い分けは、たとえ間違っても、言おうとする内容の相手には十分伝えることができる。しかし、それでは社会的に正常な関係を保つことはできない。ところが、相手との関係についてどう判断するか、その基準が年代により階層により、言語経歴によって違うところから、敬語はときに深刻な問題になる。

第二は国語国字問題である。この名称自身に「問題」ということばがついているように、早くから「問題」としてとりあげられてきた。文字・表記が一部支配者層のものだった時代には、字数がいくら多くても、学習に多少の困難が伴おうとも、語の表記がいくら不安定でも、大きな問題にはならなかった。支配者・被支配者の別なく、文字と表記を日本語を話すすべての人のものにしようとした明治以後に起きた問題である。日本は統一言語国家だが、表記については現代でも不統一、不安定であると言わざるをえない。

第三は標準語と方言の問題である。多言語国家は、一国内の言語と言語の闘争という問題をかかえているが、日本の場合は、同一言語内の標準語と方言の対立という、一段規模の小さな問題である。標準語の普及とともに方言が総体に落ち込んで、すでに、標準語と方言の問題は解決したかのように見えるが、明治以後の標準語化は、東京以外の人々の心を深く傷つけてしまっ

た。方言コンプレックスはその一つである。そういった問題が残っている。

第四は外来語の問題。外来語のない言語はないのだから、これは普遍的な問題である。しかし、現代の日本語において、外来語があまりにも多すぎるということが問題になる。数の多さだけでなく、外来語が和製英語として再生産を始めていることが問題である。「マス・コミュニケーション」が「マスコミ」になり、「コミ」が独り立ちして、「くちコミ」という新しい複合語ができた過程や、「ベース」と「アップ」を組み合わせて「ベース・アップ」という和製英語をつくり、それを略して「ベア」にした過程のなかに、これからの日本語の一つの方向が暗示されていると思う。

現代日本語が直面している、主な「ことばの問題」は、以上の四つではないだろうか。敬語と国語国字問題は、いわば「言語内」の問題であるが、方言と外来語は、言語と言語との関係、すなわち“言語間”の問題である。しかし、いずれも、ことばの音韻・文法・語彙・文字といった、言語記号がつくる構造にかかわるだけでなく、構造の外側にある人間・社会・心理との関係にかかわる問題である。

現代日本語が直面している四つの問題は、日本の近代化、機械化、都市化、国際化に日本語が対応しきれなかったことから出ていると思う。敬語、特に丁寧表現は、伝統的な狭い地域社会内では用のないものであって、現に、地域社会の方言には丁寧語を全く欠くものがある。丁寧表現は都市化とともに発達してきた。大衆社会化が進めば進むほど丁寧語は社会生活に必要な手段になってくる。ところが、一方で、情報を短時間に処理しなければならない現代に、丁寧語を含む敬語使用が能率化のネックになるという指摘もある。国語国字問題はまさに表記・文字の近代化・機械化にどう対応させるかということから起こった問題であった。標準語と方言の問題は、中央集権という一種の都市化が引き起こした問題である。外来語の問題は、国際化に伴う必然的な問題である。鎖国でもしない限り、外来語をくいとめることはできないし、それぞれ専門分野では国際的に共通の単語を使ったほうが楽だということもある。

以上のように、この『現代日本語』でとりあげた項目は現代日本語で「問題」になっている、上にあげた四つのがらが主になっている。従って、現代日本語に関する項目をすべて万遍なくとりあげたわけではない。

四つの問題をとりあげたけれども、その問題解決に直接役立つような情報

や方策は必ずしも提供していない。むしろ、問題解決について一人、一人が考えるのに役立つ情報を提供しようとした。その情報は明治以来の言語学や国語学の成果に基づくものであるが、成果の単なる解説にとどまらないで、担当者の新しい見解や資料はできるだけ盛るように努めたのである。

考えてみれば、ことばの問題は一般に、白か黒か、裏か表かという形で解決のつくようなものではない。バランスをいかにとるか、望ましい線をどこに引くかといった問題のように思われる。われわれの記述もそういう態度に貫かれている。

さて、ことがらの性質から言っても、時間的制約から言っても、全巻を一人でまとめるのは困難だったので、それぞれの専門家三人と共同執筆の形をとった。敬語は南不二男、国語国字問題は日下部文夫(ただし、「文字の機械化」だけは石綿敏雄)、外来語は石綿敏雄、そして、標準語と方言を柴田が担当した。担当した分野の項目を別々に執筆して、その原稿を集めて編集するという方法をとらず、項目を一つずつ四人で検討した。原稿をととのえるのに約二か年かかったのはそのためであった。また項目の約三分の一は修正補筆することになって、いっそう妥当な記述を得ることができたと思う。

討論したけれども、それは項目の内容と記述方法についてであって、各分野の項目の立て方自身については統一を図らなかった。ことがらが違い、見解が必ずしも一致しないのを無理に調整することを避けたからである。項目の目次は、それぞれの問題を全体としてどうとらえたかを示すものであるが、問題になることがらについて知るためには、該当項目に当たるだけでなく、索引に当たるようにしていただきたい。同一項目が数個所に、しかも、異なる分野にわたって扱われているからである。

各分野について統一したことは、分量である。討論し、修正補筆をすればどうしても長くなる。いよいよ最終的に編集する段階になって、各分野とも大幅な項目の削除を断行せざるをえなかった。編者の見通しの甘さがたたつたのである。敬語で約5項目、外来語で約10項目、国語国字問題で約40項目、標準語と方言で約50項目を割愛した。身を切られるとはこういう思いかと、涙をのんで、「小事典」という共通の乗り物に乗ったのである。

索引の作成には菊地康人君をわずらわした。出版局の池田純義氏は、われわれの討論に欠かさず出席して協力された。記して感謝の意を表する。

柴田 武

第一部 敬 語

ことばによるコミュニケーションは、人間と人間との間に起こるものであるから、そこに相手なり、話題になっている人間なりに対する話し手のなんらかの配慮があらわれるのは当然である。敬語はそうした配慮を直接的に反映する表現である。そして、それはことばの体系のある部分だけではなく、すべての部分に関係している。このような観点から敬語関係の項目をえらび、それらに解説を加えるについて、次の方針をとった。

第一に敬語の範囲を、従来の国文法で扱ってきたようなせまい意味のもの（尊敬語、謙譲語、丁寧語といった）に限定せず、なるべく広い範囲のものを見渡すことにした。場合によっては、言語表現だけでなく、非言語的な行動まで考察の対象とした。

第二に敬語を単なる言語体系上の要素としてではなく、できるだけ日常の言語生活におけるさまざまな行動の面からみようとした。

第三に敬語を、上述のように広義に考えることによって日本語だけの現象と考えず、どんな言語にもなんらかの意味での敬語的表現が存在するという前提にたち、その中で日本語の敬語の特質をつかむようにつとめた。

第四に各項目についての解説は、実際上の敬語の使い方についての直接的な指針を示すというよりもできるだけ基本的な問題を取り上げ、各人の敬語使用上の判断の資料を提供することを目標とした。

敬語とは

敬語【狭義の敬語と広義の敬語】話し手、聞き手、第三者の間の関係（社会的地位、年齢その他の上下関係や、身うちかそうでないかといった親疎関係など）や、話題の性質、あるいはその場の状況などについての話し手の配慮に基づいてさまざまな言い方を使い分けることを敬語と呼ぶ。

ただし、実際の「敬語」という語の用法には、狭義の使い方と広義の使い方が見られる。上述のような話し手の配慮に基づくいろいろな表現にもつ